

迷信・結婚・労働市場⁽¹⁾

参 鍋 篤 司⁽²⁾

要 旨

本稿では、血液型性格診断と丙午生まれ（主に 1966 年生まれ）についての二つの事例を通じ、迷信が労働生活及び結婚生活へ及ぼす影響について実証的に検討した。本稿で得られた結論は、以下のようなものである。

第一に、これらの迷信は、結婚生活・男女交際へ影響を及ぼしている可能性が高い。相対的に少数派である、AB 型及び B 型が、付き合いづらい血液型であると考えている人が多かった。そして、嫌いな血液型の人物と付き合い、結婚することを避けている事が分かった。さらに、実際に嫌いな血液型（AB 型、A 型）の人と結婚している場合、有意に結婚満足度が低いという傾向がみられた。

一方で、丙午生まれの女性・男性ともに、結婚満足度が低いという有意な結果は得られなかったものの、丙午生まれの女性は、他の 40 代女性と比べて、結婚しにくかったという傾向がみられた。

第二に、これらの迷信は、労働市場での結果（労働供給・賃金水準・仕事満足度）へ影響を及ぼさない。マーケットを通じた取引においては、これらの迷信は、殆ど影響をもちえない。

Superstition, Marital Life, and the Labour Market Outcomes in Japan

Atsushi SANNABE

Abstract

This paper investigates empirically the influence of the superstitions on romantic overture, marital life, and labour market outcomes in Japan through the two examples : the blood type character diagnosis and Hinoe-uma births(mainly, births in 1966).

We obtained the following two results:

First, such superstition has a high possibility of having had influence to marriage satisfactions and romantic overtures.

Second, the superstitions do not affect the labour market outcomes - labour supplies, wage levels, and job satisfactions.

はじめに

血液型性格診断は、われわれ日本人の心に、深く根をおろしてしまった。血液型性格診断を知らない、という日本人はほとんどいないであろう。また、殆どの人が、血液型別に語られる、それぞれの典型的な性格・人物像についてのイメージを持ってさえいるだろう。A型は几帳面であり、O型は鷹揚、B型はお調子者、AB型は二重人格、といったように。

しかし、こうした性格診断が科学的根拠を欠き、世界的に認知されたものでもないこともまた、事実である。こうした根拠のない迷信が、一時の単なるおしゃべりの材料として饗されるだけならば問題はないが、就職や恋愛、結婚に影響を及ぼしているとしたら、無視しえない問題であろう。何ら根拠のない偏見や迷信が、我々の精神（意識的・無意識的な）に影響を及ぼし、差別の問題へ発展し、なかなか克服し難い問題となりかねないことは、我々人類の歴史が示した通りである。もっとも、野暮な分析、という誹りは免れまいが。

血液型性格診断は、最近になって日本に定着した偏見・迷信である（大村（1990））。従って、偏見がどのように生まれ、人々に伝播し、社会へ影響を及ぼし始めるのかについての知見を得るための、格好の事例、観察対象であると言えよう。

また他の興味深い事例としては、古くからある丙午（ひのえうま）世代の問題があげられる。日本においては、丙午年生まれ（直近では1966年生まれ）の女性が、根拠のない迷信の犠牲になった可能性がある（赤林（2007））。丙午生まれの女性は性格が荒く、夫を不幸にする、という迷信である。八百屋お七が丙午とされたことから、こうした迷信が生まれたといわれている（詳しくは赤林（2007）を参照されたい）。

本稿においては、この血液型性格診断と丙午生まれの女性についての二つの事例を通じ、迷信が労働生活及び結婚生活へ及ぼす影響について実証的に検討した。本稿で得られた結論は、以下のようなものである。

第一に、これらの迷信は、結婚生活・男女交際へ影響を及ぼしている可能性が高い。AB型及びB型が、付き合いづらい血液型であると考えている人が多かった。AB型が付き合いづらいと回答した人の配偶者・交際相手が実際にAB型である確率は実際

の分布から想定される確率よりもかなり低く、同様のことが残りすべての型にも当てはまる。つまり、B型が嫌いだと回答した人はB型と付き合ったり結婚していたりする確率が有意に低く、それはO型、A型においてもそうである。これは、嫌いな血液型の人物と付き合い、結婚することを意識的・無意識的に避けているためだと考えられる。

さらに、男性の場合、AB型・A型・B型が嫌いな人が、実際にそれぞれの嫌いな型を持つ人と結婚している場合、有意に結婚満足度が低かった。女性の場合、AB型・A型が嫌いな人が、実際にそれぞれの嫌いな型を持つ人と結婚している場合、有意に結婚満足度が低かった。

一方で、丙午生まれの女性・男性ともに、結婚満足度が低いという有意な結果は得られなかったものの、丙午生まれの女性は、他の40代女性と比べて、結婚しにくかったという傾向がみられた。また、丙午生まれの女性は、結婚に至るまで交際した男性の数が多いう傾向にあるため、実際に結婚に至る相手が見つかるまで、苦勞を強いられた可能性がある。

第二に、これらの迷信は、労働市場での結果（労働供給・賃金水準・仕事満足度）へ影響を及ぼさない。マーケットを通じた取引においては、これらの迷信は、殆ど影響をもちえない。

上述の結果は、マーケットを通じこれらの偏見は淘汰される傾向が強いが、それらはマーケット・メカニズムの見えざる手の届かざる、個人の恋愛といった私的・心理的領域において非合理に生じ、残ってしまう可能性を示しているといえよう。また、丙午生まれの女性は圧倒的に少数であり、B型、そして特にAB型は少数派である。

丙午の様な迷信は、無根拠であるにも関わらず、ネガティブな偏見がマイノリティに対して生成され、さらに、そのような偏見によって丙午に子供を産む人が減ることで、ますますマイノリティになっていく、という悪循環が生じる可能性を示した事例であると考えられる。本稿の構成は、以下の様である。1 既存研究 においては既存研究について、本稿と関連のあるものについて述べ、本稿の位置するところを述べる。2 データ においては、本稿で使用するデータについて説明する。3 記述統計と推計 では推計方法とその結果について述べ、おわりに では結論を述べる。

1 既存研究

血液型性格診断が世間に浸透するきっかけとなったのは、ベストセラーとなった能見正比古氏の一連の著作（能見（1971）など）であろう。また、現在でも、血液型性格診断を扱った書物はしばしば、何百万部というベストセラーとなっている。血液型性格診断については、社会心理学を中心とした研究の蓄積があり、殆どの研究がその非科学性を指摘しているといつてよい（大村（1990）、佐藤（1993））。そのような認識はもはや前提となっているので、従って、何故血液型性格診断が世間に流布するようになったのか、という部分に今後の研究の方向は向けられていくと考えられる（佐藤（1993））。

本稿では、多くの人々が血液型性格診断を信じるに至る過程ではなく、血液型性格診断を信じることの結果として、実際に社会に及ぼしている影響について確認することを目的とする。

一方、古い迷信として、丙午生まれの女性についての偏見があげられる。丙午世代の問題については赤林（2007）が詳しい。本稿では、赤林（2007）が提起した諸問題の一部について、マイクロ・データを用いて検討する。詳細はIV節において述べる。

また、言うまでもなく世界には多くの迷信が存在する。その中でも有名なものは、十三日の金曜日についてのものであろう。Näyhä（2002）では、13日の金曜日に事故死する可能性は女性のほうが高いことを示している。本論文ではこれを女性の方がより迷信を信じているため、心配が昂じるあまり、より運転を誤りやすくなるからである、と結論している。

また、日本の大安・仏滅（六曜）についての研究として、Hira et al.（1998）があげられる。Hira et al.（1998）は、京都大学付属病院では、大安に退院する人が最も多く、仏滅に退院する人が最も少ないこと、大安に退院する人に多いのはお年寄りであり、女性の比率が高いこと、大安になるまで入院期間を延ばす事例が多くみられること、を指摘し、医療費を高騰させる一つの要因となっていることを指摘している⁽³⁾。

2 データ

本稿で使用するデータは、「地域間格差生成の要因分析と格差縮小政策」（科学研究費補助金 基盤研究（A） 研究課題番号 19203012 研究代表者

橋本俊詔）の研究資金により実施されたアンケート調査「ライフプランニングと幸福感に関するアンケート」の結果を用いている。配布は2009年9月に、無作為抽出によるwebアンケートで39000名に実施（（株）NTT レゾナント リサーチ部門（goo リサーチ）により実施）され、有効回答として6757件を得ている。なお、本稿では、約一名であった十代のサンプルを除き、6756のサンプルを用いている。

3 記述統計と推計

3-1 血液型について

本稿において用いる諸変数の記述統計を表1に示す。ここに示されていない変数については、後にそれぞれの個所で示す。

各血液型の分布は、おおよそ、他の統計と同様の分布を示しており、A、O、B、ABの順に数が多い。

日本赤十字社ホームページ（<http://www.jrc.or.jp/blood/knowledge/tipe/index.html>）によれば、日本人の血液型分布は、A型約40%、O型30%、B型20%、AB型10%となっており、本稿での分布とほぼ一致する。また、年齢の平均は、44.3歳（日本社会保障人口問題研究所推計）、本データ42.81歳であり、平均年齢はそれほどの差は見られない。

教育水準は、最終学歴が大学・大学院である割合は、男28.7%、女11.9%（国勢調査）、本データでは男61.7%、女35.1%であり、本データサンプルは比較的かなり高学歴であると言えよう。世帯所得については、国民生活基礎調査によれば、2009年では547.5万円であり、本データでは665.5万円となっており、平均よりも世帯所得は若干高い水準となっている。

次に、血液型別の性格診断を信じるか、という質問に対する答えの分布を示したものが、表2である。

男女合わせたサンプルにおいて、「信用している」、「ある程度信用している」と回答した割合は、四割にも達しているが、注目すべきは男女差であろう。女性の場合は、これら二つを合わせた割合は、五割であるのに対し、男性は三割である。これは先ほど述べたように、女性のほうが一般的にみて迷信深い、ということからきていると思われる。

次の表3は、この血液型の人は苦手だ、付き合いにくい、という血液型がありますか。という問いに

表1 記述統計

Variable	Obs	Mean	Std. Dev.	Min	Max
血液型 A	6756	0.38	0.49	0	1
血液型 B	6756	0.22	0.41	0	1
血液型 O	6756	0.29	0.45	0	1
血液型 AB	6756	0.10	0.30	0	1
自分の血液型を知らない	6756	0.01	0.10	0	1
嫌いな血液型がある	6756	0.43	0.50	0	1
B 型が嫌い	6756	0.18	0.38	0	1
AB 型が嫌い	6756	0.14	0.35	0	1
O 型が嫌い	6756	0.03	0.18	0	1
A 型が嫌い	6756	0.07	0.26	0	1
丙午生まれの女性	6756	0.01	0.10	0	1
丙午生まれの男性	6756	0.01	0.12	0	1
丙午生まれの男性女性	6756	0.03	0.16	0	1
丙午生まれの男性女性前後一年	6756	0.10	0.30	0	1
賃金 (単位: 万円)	6289	442.03	302.57	100	1700
現在の仕事の勤続年数	5987	10.05	9.61	0	55
現在の仕事の内容	5987	3.01	1.31	1	5
現在の仕事が必要とする習熟度	5987	2.80	1.10	1	5
一週間の総労働時間 (単位: 時間)	6756	33.48	19.21	0	62.5
年齢	6756	42.81	10.41	20	88
看病の大変さ	6756	1.50	0.92	1	5
就業ダミー	6756	0.89	0.32	0	1
家計全体の所得 (単位: 万円)	6756	665.48	367.12	100	2050
子供の数	6756	1.00	1.08	0	6
末子が就学前	3586	0.30	0.46	0	1
末子が小中学生	3586	0.32	0.47	0	1
末子が高校生以上で未婚	3586	0.30	0.46	0	1
末子が高校生以上で既婚、または結婚経験あり	3586	0.07	0.26	0	1
配偶者の親と同居	6756	0.01	0.11	0	1
借入制約	6756	0.08	0.27	0	1
現在の仕事を希望していた度合い	5987	3.10	1.00	1	5
二十代ダミー	6756	0.09	0.29	0	1
三十代ダミー	6756	0.32	0.47	0	1
四十代ダミー	6756	0.35	0.48	0	1
五十代ダミー	6756	0.17	0.38	0	1
六十代以上ダミー	6756	0.07	0.25	0	1
大学卒ダミー	6756	0.51	0.50	0	1

表2 血液型診断の信用度

	全体	全体	女性	男性
	Freq.	Percent	Percent	Percent
信用している	297	4.4	5.59	3.58
やや信用している	2,338	34.61	45.82	26.98
どちらとも言えない	1,427	21.12	21.58	20.81
あまり信用していない	1,347	19.94	16.61	22.2
信用していない	1,347	19.94	10.41	26.43
		100 (%)	100 (%)	100 (%)
observation	6,756	6,756	2,738	4,018

表 3 嫌いな血液型 (全体)

	全体		女性	男性
	Freq.	Percent	Percent	Percent
ない	3,852	57.01	45.6	64.78
A	479	7.09	8.98	5.8
B	1,217	18.03	21.98	15.33
O	232	3.43	4.75	2.54
AB	976	14.44	18.69	11.55
		100 (%)	100 (%)	100 (%)
observation	6,756	6,756	2,738	4,018

表 3-1 嫌いな血液型 (本人が A 型)

	全体		女性	男性
	Freq.	Percent	Percent	Percent
ない	1,394	54.18	43.36	61.6
A	28	1.09	1.91	0.52
B	729	28.33	33.62	24.71
O	102	3.96	4.87	3.34
AB	320	12.44	16.24	9.83
		100 (%)	100 (%)	100 (%)
observation	2,573	2,573	1,047	1,526

表 3-2 嫌いな血液型 (本人が B 型)

	全体		女性	男性
	Freq.	Percent	Percent	Percent
ない	886	59.38	47.09	68.08
A	277	18.57	23.79	14.87
B	37	2.48	3.72	1.6
O	60	4.02	5.5	2.97
AB	232	15.55	19.9	12.47
		100 (%)	100 (%)	100 (%)
observation	1,492	1,492	618	874

表 3-3 嫌いな血液型 (本人が O 型)

	全体		女性	男性
	Freq.	Percent	Percent	Percent
ない	1,074	55.08	42.71	63.36
A	124	6.36	7.16	5.82
B	330	16.92	21.99	13.53
O	18	0.92	1.15	0.77
AB	404	20.72	26.98	16.52
		100 (%)	100 (%)	100 (%)
observation	1,950	1,950	782	1,168

表 3-4 嫌いな血液型 (本人が AB 型)

	全体		女性	男性
	Freq.	Percent	Percent	Percent
ない	445	66.12	57.52	71.74
A	49	7.28	8.27	6.63
B	113	16.79	19.17	15.23
O	51	7.58	13.16	3.93
AB	15	2.23	1.88	2.46
		100 (%)	100 (%)	100 (%)
observation	673	673	266	407

表 3-5 嫌いな血液型 (本人の型を知らない)

	全体		女性	男性
	Freq.	Percent	Percent	Percent
ない	53	77.94	68	83.72
A	1	1.47	4	0
B	8	11.76	12	11.63
O	1	1.47	4	0
AB	5	7.35	12	4.65
		100 (%)	100 (%)	100 (%)
observation	68	68	25	43

対して、1. ない 2. A 3. B 4. O 5. AB の 5 つの選択肢から一つを選んで回答してもらったものの分布を示している。

最初には全体の分布を、次には、本人の血液型が A、B、O、AB、知らない・分からない、の 5 つのパターンに分けて、その分布の違いを検討した。B 型と AB 型を嫌いだと答えた人が多い。これは、佐藤 (1993) の結果と一致する。もっとも、本人が B の場合は A、AB を嫌いだと答える人が多くなっている。

B、AB の血液型は比較的次数が少なく、マイナーな部類にはいるが、それ故にネガティブなイメージが付いているのであれば非常に問題である。しかし、マイナーなグループには特に根拠もなくネガティブな評価ができあがっていく、という現象は興味深い。

そして、B 型と AB 型を嫌いだと答えた人が多い。これは、佐藤 (1993) の結果と一致する。この二つの血液型は比較的次数が少なく、マイナーな部類にはいるが、それ故にネガティブなイメージが付いているのであれば非常に問題である。しかし、マイナーなグループには特に根拠もなくネガティブな評価ができあがっていく、という現象は興味深い。

次の表 4 は、配偶者あるいは現在の交際相手の血液型についての分布である。回答者自身の分布とそれほど変わらないことが分かる。

そして表 5 は、B 型を嫌いだと答えた人の、配偶者・交際相手の血液型分布を示したものである。明らかに、通常の分布に比べて、B 型の割合が低い。

次の表 6 は同様に AB 型を嫌いだと答えた人に関して分布をみたものであるが、これもまた、AB 型の割合が低い。この表二つについてそれぞれカイ二乗

表4 自分と配偶者（交際相手）の血液型

		相手	自分
	Freq.	Percent	Percent
A	1,792	35.14	37.75
B	1,160	22.75	22.32
O	1,501	29.43	28.91
AB	468	9.18	10.24
知らない	179	3.51	0.78
		100 (%)	100 (%)
observation		5099	5,099

表5 嫌いな血液型がBである人の、配偶者の血液型の分布

	B型が嫌いな人				そうでない人
配偶者の血液型	全体	女性	男性		
	Freq.	Percent	Percent	Percent	Percent
A	359	39.58	43.57	35.7	34.18
B	128	14.11	11.96	16.13	24.62
O	311	34.29	32.96	35.7	28.36
AB	95	10.47	9.48	11.4	8.9
知らない	14	1.54	2.03	1.08	3.94
		100 (%)	100 (%)	100 (%)	100 (%)
observation		907	442	465	4,192

*そうでない人 とは、嫌いな血液型はB型と答えた以外の人

表6 嫌いな血液型がABである人の、配偶者の血液型の分布

	AB型が嫌いな人				そうでない人
配偶者の血液型	全体	女性	男性		
	Freq.	Percent	Percent	Percent	Percent
A	289	37.73	39.69	35.66	34.69
B	193	25.2	26.46	23.86	22.32
O	227	29.63	26.72	32.71	29.38
AB	40	5.22	4.58	5.9	9.88
知らない	17	2.22	2.54	1.88	3.74
		100 (%)	100 (%)	100 (%)	100 (%)
observation		766	393	373	4,333

*そうでない人 とは、嫌いな血液型はAB型と答えた以外の人

テストを行うと、それぞれ1%水準で有意な差が認められる。B型、AB型それぞれが嫌いだと答えた人々は、意識的にか、あるいは無意識的にか、それぞれの血液型の人を配偶者として、あるいは交際相手として避けていると考えられる⁽⁴⁾。

次に、実際に嫌いな血液型と結婚している人についても影響を調べた。結婚生活満足度を被説明変数とし、嫌いな血液型、実際の配偶者の血液型を説明変数とし、さらにそれらの交差項を説明変数として含むオーダード・ロジット分析、及びOLS推計を

行った。

このような推計を行う場合、「結婚満足度」と「嫌いな血液型」の間に、内生性が生じる可能性がある。即ち、結婚満足度が低いと、その影響により、嫌いな血液型が生じてしまう可能性がある。従って、以下ではWooldridge (2002)に従い、内生性のテストを行う。具体的な手順は、まず嫌いな血液型ダミーA、B、O、ABそれぞれを被説明変数とし、操作変数として自己の血液型を用い、また表7で用いられている説明変数を加え、OLSを行う。なお、

表7 結婚満足度についてのオーダード・ロジット分析と OLS 分析

	(1)	(2)	(3)	(4)
	男性	女性	男性	女性
	Logit	Logit	OLS	OLS
丙午生まれダミー (本人)	-0.145	0.137	-0.0641	-0.0386
〈嫌いな型と配偶者の型が一致 (交差項)	(0.312)	(0.397)	(0.178)	(0.240)
B	-0.669	-0.335	-0.449*	-0.234
	(0.428)	(0.397)	(0.238)	(0.250)
AB	-1.610**	-1.267***	-0.954**	-0.628**
	(0.821)	(0.366)	(0.447)	(0.245)
A	-1.122*	-1.055**	-0.642**	-0.600**
	(0.576)	(0.514)	(0.313)	(0.302)
O	-0.755	-0.744	-0.471	-0.274
〈配偶者の型〉	(1.088)	(0.653)	(0.521)	(0.398)
A	0.663**	0.207	0.274	0.143
	(0.310)	(0.474)	(0.181)	(0.322)
B	0.659**	0.296	0.298	0.184
	(0.315)	(0.483)	(0.183)	(0.326)
O	0.673**	0.544	0.268	0.341
	(0.314)	(0.478)	(0.184)	(0.323)
AB	0.778**	0.457	0.320	0.268
〈嫌いな型〉	(0.351)	(0.503)	(0.196)	(0.335)
A	0.0112	0.0929	0.00990	0.0426
	(0.260)	(0.235)	(0.127)	(0.133)
B	-0.427**	-0.0982	-0.204**	-0.0659
	(0.174)	(0.161)	(0.0888)	(0.0934)
O	-0.373	0.0414	-0.179	-0.0336
	(0.304)	(0.313)	(0.160)	(0.167)
AB	-0.477***	0.140	-0.223**	0.00783
	(0.160)	(0.184)	(0.0867)	(0.0991)
家族の看病の大変さ	-0.0748	-0.0430	-0.0265	-0.0262
	(0.0560)	(0.0647)	(0.0283)	(0.0368)
仕事をしているダミー	-0.694**	0.0613	-0.362***	0.0329
	(0.279)	(0.139)	(0.137)	(0.0795)
Log (配偶者の賃金)	-0.0977	0.935***	-0.0392	0.562***
	(0.0898)	(0.233)	(0.0443)	(0.127)
Log (家計全体の所得)	0.386***	0.00159	0.180***	-0.0181
	(0.133)	(0.255)	(0.0661)	(0.141)
子供の数	0.111	0.108	0.0652	0.0788*
	(0.0781)	(0.0795)	(0.0404)	(0.0463)
大卒ダミー	0.112	0.240*	0.0413	0.0960
	(0.116)	(0.144)	(0.0582)	(0.0777)
末子が小中学生ダミー	-0.646***	-0.481***	-0.346***	-0.312***
	(0.176)	(0.183)	(0.0868)	(0.100)
末子が高校生以上で未婚ダミー	-0.266	-0.319	-0.138	-0.190
	(0.199)	(0.228)	(0.0978)	(0.131)
末子が高校生以上で既婚または結婚経験有りダミー	-0.100	0.347	-0.0903	0.192
	(0.286)	(0.373)	(0.138)	(0.198)
三十代ダミー	-0.893	0.0407	-0.471**	0.0605
	(0.642)	(0.335)	(0.235)	(0.189)
四十代ダミー	-1.129*	-0.455	-0.597**	-0.217
	(0.652)	(0.364)	(0.242)	(0.208)
五十代ダミー	-1.024	-0.440	-0.555**	-0.168
	(0.661)	(0.399)	(0.249)	(0.229)
六十代以上ダミー	-1.166*	-0.453	-0.627**	-0.161
	(0.676)	(0.462)	(0.259)	(0.266)
配偶者の親との同居ダミー	-0.242	-0.176	-0.141	-0.117
	(0.555)	(0.345)	(0.243)	(0.245)
Observations	1,283	1,044	1283	1044
Pseudo R2	0.0272	0.0412	0.0714	0.1120
Log likelihood	-1596	-1387	-1757	-1757

Robust standard errors in parentheses

*** p < 0.01、** p < 0.05、* p < 0.1

操作変数についてのF検定を行ったところ、5%水準で全てのケースにおいて有意であった。即ち、weak instrumentsの問題は生じていない。

次に、被説明変数を結婚満足度とし、表7の説明変数に加えて、先ほどのOLS推計により得られた誤差項を説明変数として加えOLS推計を行い、その誤差項が有意であるのならば内生性があると見做す。結果は、すべてにおいて非有意であり、内生性をコントロールすると、効率性が損なわれることが分かったため、以下では操作変数を用いた推計は行わない。

その結果は表7に示されている⁽⁵⁾。オーダード・ロジット分析だけでなく、OLS推計も行った理由は、Ai and Norton (2003)によれば、説明変数に交差項を含む場合、ロジットやプロビットといった非線形推計における場合、その結果が不安定となることがある、という指摘に依っている。従って、オーダード・ロジット分析の結果は参考として記すにとどめ、結果は主にOLS推計により得られたものを中心として解釈を行う。もっとも、得られる解釈は、B型の場合を除き変わらない。

AB型が嫌いと言った人で、実際にAB型と結婚している人の結婚満足度は、有意に低かった。従って、AB型を嫌いな人は、そもそもAB型と付き合い、結婚するということが自体が少ないし、結婚したとしても相手との結婚に満足できない傾向がある、ということになる。同様のことがA型にもあてはまる。しかしその限界効果の大きさをAB型と比較すると（表7のオーダード・ロジット分析の結果は係数値を示しているのでOLS推計の結果により比較する）、やはりAB型の方が大きく、AB型のケースにおいてより影響は強いと言える。

また、それぞれの型の典型的なキャラクターとしてイメージされがちであるとされる性格特性（例えば、AB型；二面性・神経質、A型；几帳面、B型；わがまま、O型；のんびり（佐藤（1993）））が、人ならば誰もが時折見せるその種の態度と結合し、不満を生じさせる原因と認識され易くなる可能性もあろう。表7から言えば、例えば男性は女性のわがまさを血液型（B型）から来るものと認識し、男女とも、配偶者の几帳面さ・細かさに対する不満が、血液型により生じるとされる性格特性と合わさって結婚満足度を低下させていると思われる。以上、もっともマイノリティであるAB型が、ネガティブ

な評価を受けていることがわかったといえよう。

次に、これらの型に属する人々が、労働市場において不利な扱いを受けているのかについて検討するが、その推計は丙午世代の影響と同時に見ることが可能なので、その問いはひとまず置き、丙午世代について検討する。

3-2 丙午について

先述したように、丙午世代についての先行研究としては赤林（2007）、Akabayashi（2007）があげられる。そこで提起された問題のうち、丙午世代の「育った家庭の状況」、「労働市場における状況」、「結婚生活の状況」について、以下それぞれ検討する⁽⁶⁾。第一に、丙午生まれの育った環境はどのようなものか、という問いである。この問は、丙午の年に生まれるということ（そしてそれにより不利な扱いを受けるということ）が持つ意味と、そのような年に子供を持つという決断をした両親を持った⁽⁷⁾、という二つの効果を区別するために必要である。表8、表9には、丙午世代の人と、その他の人々との間に、「父親の学歴」「母親の学歴」「生まれたときの家庭の相対的豊かさ」の三つについて、40-49歳の男女のサンプルについて示したものである。

父親の学歴・母親の学歴・生まれたときの相対的豊かさの三つに差はなく、カイ二乗テストにおいても、10%水準でも差は認められない。従って、これらの要因においては、丙午世代に特有な事情は見いだせない。この結論は、大谷（1993）と一致する⁽⁸⁾。

第二に、結婚事情についてである。赤林（2007）では、丙午生まれの女性だけでなく、男性もやや有配偶率が低いことが示されていた。2009年時点に採取された独自のマイクロ・データを用いた本稿では、このような現象は観察されなかった。四十代女性について、丙午の年に生まれたかどうかで結婚率に差があるかどうか比較をしたが、結婚率はともに67%で、現在時点ではもはや差は観察されない。また現在の結婚満足度を推計した表7においても、男女とも丙午世代とそのほかの世代に有意な差は見られなかった。そこで、現在の結婚に至る期間をDurationとしたイベント・ヒストリー分析として、カプラン・メイヤー法により得られたのが図1である。

サンプルを四十代女性に限り、丙午の年生まれと

表 8 丙午世代の育った環境

	父親の学歴 (40-49 歳の男女の)				母親の学歴 (40-49 歳男女の)			
	丙午世代		それ以外		丙午世代		それ以外	
	Freq.	Percent	Freq.	Percent	Freq.	Percent	Freq.	Percent
中学卒	36	21.3	514	23.72	32	18.93	606	27.96
高校卒	69	40.83	758	34.98	93	55.03	997	46.01
専修学校卒 (専門学校を含む)	6	3.55	79	3.65	19	11.24	89	4.11
短大・高専卒	0	0	42	1.94	7	4.14	136	6.28
大学卒 (旧制高校・旧制専門学校・ 高等師範学校を含む)	45	26.63	549	25.33	8	4.73	150	6.92
大学院卒	3	1.78	29	1.34	0	0	3	0.14
その他	5	2.96	49	2.26	1	0.59	35	1.62
分からない	5	2.96	147	6.78	9	5.33	151	6.97
Total	169	100(%)	2,167	100(%)	169	100(%)	2,167	100(%)

表 9 丙午世代の生まれた時の家庭の相対的豊かさ

	丙午世代		それ以外	
	Freq.	Percent	Freq.	Percent
上	2	1.18	48	2.22
中の上	42	24.85	555	25.61
中の下	68	40.24	892	41.16
下の上	48	28.4	523	24.13
下の下	9	5.33	149	6.88
Total	169	100(%)	2,167	100(%)

*それ以外 は、40-49 歳の、丙午の年生まれを除く男女

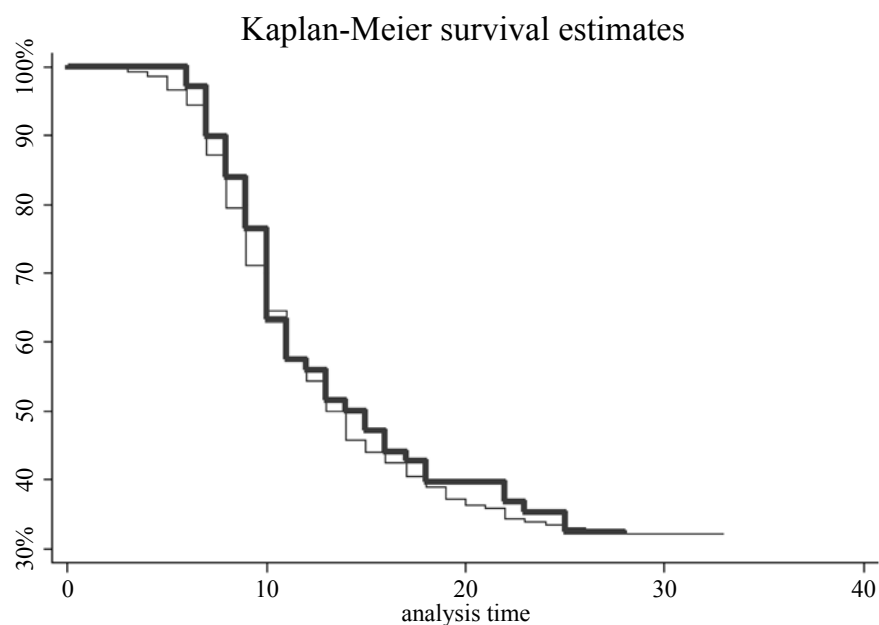


図 1 カプラン・メイヤー法

それ以外の年生まれについて比較した⁽⁹⁾。縦軸は未婚率を表し、横軸は16歳を起点とした、経過年数である。太いほうの曲線が丙午生まれの女性を示し、細い方の曲線がその他の四十代女性を示している。両者の生存曲線に有意な差があるかどうか、ログランク検定を行ったところ、5%水準で有意であり、両者の曲線は異なったものであると判定されることになる⁽¹⁰⁾。

従って、丙午生まれの女性が結婚に至るまでやや時間を要した様子が見て取れる。またさらに、現在の結婚相手と知りあうまでに付き合った男性の数は、丙午生まれの女性が平均で3.8人、それ以外の四十代女性は2.9人であり、t検定を行っても5%で有意な差が認められる。このため、結婚に至るような相手を探すのに苦労をした可能性も指摘できよう⁽¹¹⁾。なお、血液型別に同様な検定を行っても、有意な差は得られなかった。

最後に、労働市場における状況である。卒業時に少ない人口であるコーホートに属することから、卒業してすぐの労働市場におけるパフォーマンスは、他の世代と比べ有利である可能性がある。40代が大学を卒業した時期は好景気の時代であったので、就職自体は比較的容易であったと思われる。従って、人気の高い大規模な企業に入ることが容易になるかどうかが実質的な問題になろう。そこで、丙午とその前後1年に属する男女（1965、1966、1967）と、それ以外の40代男女とで、大学卒業後入社した企業規模について比較したものが、表10である。

確かに、このグループに属する人の方が、より大きな企業に入社している。カイ二乗テストにおいても1%水準で有意である。この意味で労働市場において有利であった可能性はある。しかし一方で、高

校卒業と同時に就職した場合、1966年生まれの男女が、大企業に就職するのに容易であった、という事実は観察できなかった。従って、好景気（バブル景気）の時代に社会に出た、という効果を拾っているだけの可能性が高いであろう。そこで、卒業後最初に就職した企業の規模を被説明変数として、説明変数を丙午生まれダミーとする推計を行ったところ、大卒者については有意に正、高卒者では非有意であった。そこで、二十代ダミーをベースとして、30代、40代、50代、60以上ダミーを加えたところ、丙午生まれダミーはどちらのケースでも非有意であった。従って、やはり好景気な時代を反映したものであったと考えられる。

次に、これらの世代の人が現在の労働市場においてどのような状況におかれているのかについて検討する。ここでは、先ほどの血液型別の状況についても併せて検討する。まず、現在、就業しているか否かについてのダミー変数を被説明変数としたプロビット回帰分析を行い、logをとった年間賃金所得を被説明変数とする賃金関数を推計し、ヘックマン二段階推計を行った。一段階目の推計には用いるが、二段階目では説明変数として用いないセクション変数として、子供の数、末子の年齢段階、借入制約の有無を用い、二段階目と同じものとしては年齢ダミー、大卒ダミーを用いた。しかし、逆ミルズ比の値は小さく有意性もないため、以下では別々に推計を行った。その結果は表11に示されている⁽¹²⁾。

まず、就業しているか、していないかについてのプロビット分析の結果（column(1)）であるが、丙午生まれ女性ダミーは非有意であり、その意思決定に影響を及ぼしてはいなかった。血液型も同様であ

表10 卒業後最初に就職した企業の規模（40代男女）

		大卒者				高卒者			
		丙午		それ以外		丙午		それ以外	
〈従業員数〉	n	Freq.	%	Freq.	%	Freq.	%	Freq.	%
30人未満	1	37	12.42	150	18.7	126	33.07	279	32.78
30-99人	2	32	10.74	85	10.6	65	17.06	134	15.75
100-299人	3	38	12.75	117	14.59	56	14.7	152	17.86
300-999人	4	46	15.44	120	14.96	46	12.07	90	10.58
1000人以上	5	145	48.66	330	41.15	88	23.1	196	23.03
Total		298	100	802	100	381	100	851	100
平均値（1-5）		3.77		3.49		2.75		2.75	

*平均値（1-5）は、1から5の回答値（n）の平均値を示したもの

表 11 四十代男女の労働市場におけるパフォーマンス

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
	労働供給	Log (賃金)		仕事満足度	
	女性	女性	男性	男性	女性
B 型	0.0481 (0.0553)	0.0139 (0.0515)	0.0210 (0.0479)	-0.217 (0.319)	0.411 (0.383)
O 型	-0.0706 (0.0563)	0.0119 (0.0504)	0.0185 (0.0410)	-0.272 (0.284)	-0.431 (0.309)
AB 型	-0.0700 (0.0895)	0.104 (0.0731)	-0.0499 (0.0593)	0.470 (0.578)	-0.101 (0.446)
丙午生まれ	-0.0614 (0.0878)	-0.0933 (0.0612)	-0.0149 (0.0560)	-0.345 (0.590)	0.133 (0.444)
Log (賃金)				0.571* (0.326)	0.620** (0.279)
Log (配偶者・交際相手の賃金)	-0.167*** (0.0508)			-0.103 (0.277)	-0.0331 (0.217)
子供の数	0.0501 (0.0319)			-0.252 (0.172)	0.254 (0.184)
末子の年齢水準	0.101*** (0.0340)			-0.104 (0.203)	-0.215 (0.185)
借入制約	0.0256 (0.0521)			-0.256 (0.200)	0.192 (0.169)
勤続年数		0.00739* (0.00394)	0.0114*** (0.00261)	0.0378 (0.0264)	0.0204 (0.0183)
現在の仕事を希望していた程度				0.854*** (0.191)	0.890*** (0.159)
業務内容の非定型さ		0.00666 (0.0174)	0.0179 (0.0163)	-0.143 (0.111)	-0.0268 (0.107)
必要とする習熟度		0.0480** (0.0230)	0.0879*** (0.0203)	0.133 (0.174)	-0.119 (0.131)
一週間の勤務時間		0.00776*** (0.00178)	0.00325*** (0.00119)	-0.0140 (0.0112)	-0.0119 (0.00788)
大卒ダミー	-0.0471 (0.0543)	0.0754 (0.0518)	0.228*** (0.0372)	0.496 (0.337)	0.173 (0.278)
産業、企業規模、雇用形態ダミー included?	no	yes	yes	yes	yes
Observations	406	610	876	293	287
R-squared (PseudoR2)	0.0634	0.493	0.382	0.113	0.121
Log likelihood	-216.4	-403.2	-608.5	-358.3	-371.6

Robust standard errors in parentheses. *** p < 0.01, ** p < 0.05, * p < 0.1

* 末子の年齢水準は低い順（末子が就学前）が 1 から、（末子が高校生以上で結婚の順）の 4 までを用いている。

る。また、賃金を被説明変数とした推計（column (2)、column (3)）においても、同様に丙午の変数は非有意である。また、どの血液型のダミー変数も有意ではなかった。従って、血液型による収入格差といったものは、存在しない。そして、仕事全般に関する満足度を被説明変数としたオーダード・ロジット分析の結果も示した（column (4)、column (5)）。この場合も、血液型および丙午の効果は有意ではなく、その影響を見ることはできなかった。

従って、これらの迷信は、現在のところ、マーケッ

ト・メカニズムの働く余地のある労働市場においては、影響を及ぼしているとは言い難い。

おわりに

競争的な労働市場において、雇用者の嗜好で差別がおこなわれていたら、やがてその企業は淘汰されるので、差別は起こり得ない (Becker (1971))。従って、一般的に、経済合理性に欠ける差別は、競争的な市場を通じた取引においては存続することが難しい。

従って、迷信などの科学的根拠に基づかない差別の問題は、賃金など経済的な問題というよりも、むしろ結婚等の心理的・個人的な領域の問題として現れがちである。また、偏見の対象となるのが、少数者であることは、血液型性格診断の事例において見事に表れているといえる。

上述のように、心理的な領域における差別感情は比較的に存続する可能性が高いと思われるので、労働市場が買い手独占に陥り、競争圧力が低下した場合、根拠のない迷信が、経済的な影響を及ぼすようになる可能性もあることに注意すべきだろう。

本稿では、血液型性格診断を信じることと交際相手との関係について指摘したが、信じている人にとって、自己の行動に影響を及ぼすようになる可能性も指摘できよう。例えば、自分はA型なので、自分は几帳面な仕事が向いている、従って会計や簿記の仕事をしよう、といった思考を行う者が今後現れる可能性も指摘できる。

注

- (1) 本稿を作成するにあたり、本誌匿名のレフェリー二名及び編集委員の方々より、大変貴重なコメントを頂いた。記して感謝する。
- (2) 本研究について、京都大学大学院経済学研究科「京都エラスムス計画」より資金援助を受けた。記して感謝する。
- (3) この二つの迷信において触れられているように、迷信を信じている確率が高いのは女性であるといえる。また、後に見るように、血液型性格診断を信じている確率が高いのも女性である。こうした現象がなぜ見られるのかについて検討することは、本稿の考察の範囲を超えるため、今後の課題としたい。
- (4) 配偶者・交際相手の血液型を被説明変数としたマルチ・ノミナル・ロジスティック分析においても、この結果はそれぞれ1%水準で有意である。また、A型（O型）が嫌いというグループもそれぞれ、実際の配偶者・交際相手がA型（O型）である確率は低く、同様にカイ二乗検定を行ったところ、1%水準で有意であった。
- (5) 丙午生まれダミー（これは、回答者本人が丙午生まれであるかどうかを示す）は非有意であったが、これについては後で言及する
- (6) 赤林（2007）では、「受けた教育についての状況」についても言及しており、丙午世代がやや国公立大学へ進学する可能性が高かったことを指摘している。本稿でもそうした傾向は微かに認められたものの、他に特筆すべき特徴は見られなかったため、割愛した。
- (7) そのような決断をした（あるいは迷信の存在を知らなかった）両親について、ある一定の傾向（所得水準の高い低いなどの）が存在すれば、推計上問題が生じることになる。
- (8) 本稿では、長子であることや、兄弟の数などはデータ

の制約により観察していない。

- (9) ここでは、初婚年齢のデータが手に入らないので、現在の結婚が何歳時に行われたか、がイベントとなっていることに注意されたい。
- (10) しかし一方で、一般化ウィルコクソン検定を行うと有意ではない。前谷（1996）によれば、ログランク検定は生存期間の前期に重点を置いたテストであるが、一般化ウィルコクソン検定はそれよりもさらに早い時期の両曲線の乖離について鋭敏であるとしている。しかし分析の開始時期は結婚が法的に可能になる16歳となるため、実際に結婚がおこなわれる時期にしては早すぎるので、それほど早期の差異に着目する必要はないだろう。
- (11) 男性の場合、両者の曲線に統計的に有意な差はどちらの検定を行っても見られなかった。
- (12) 借入制約や子供の数、等といった説明変数が定式化により異なる場合、サンプル数が変動する。また、推計を40代男女に限定した理由としては、血液型別性格診断が流布しだした状況が年代により大きく異なるであろうこと、また丙午生まれとそうでない人との比較として、社会経済状況が大きく異なる状況でその影響を比較するよりも、そうしたマクロ状況がかなり近い状況で比較することが必要であるためである。

参考文献

- 赤林英夫「丙午世代のその後—統計から分かること」『日本労働研究雑誌』12月号 pp.17-28, 2007.
- 大谷憲司『現代日本出生力分析』関西大学出版部, 1993.
- 大村政男『血液型と性格』福村出版, 1990.
- 佐藤達哉「血液型性格関連説についての検討」『社会心理学研究』8巻3号, pp.197-208, 1993.
- 能見正比古『血液型でわかる相性』青春出版社, 1971.
- 前谷俊三著『臨床生存分析—生存データと予後因子の解析』南江堂, 1996.
- Ai, Chunrong and Norton, Edward C. “Interaction terms in logit and probit models,” *Economics Letters*, 80(1), pp.123-129, 2003.
- Gary S. Becker *The Economics of Discrimination*, University of Chicago Press, 2nd Edition, 1971.
- Simo N  yh   “Traffic deaths and superstition on Friday the 13th” *The American Journal of psychiatry*, 159, pp.2110-2111, 2002.
- Kenji Hira, Tsuguya Fukui, Akira Endoh, Mahbubur Rahman, and Munetaka Maekawa
- “Influence of superstition on the date of hospital discharge and medical cost in Japan: retrospective and descriptive study” *BMJ*, 317, pp.1680-1683, 1998.
- Jeffery. M. Wooldridge (2002) “Econometric Analysis of Cross Section and Panel Data”, MIT Press, 2002.